

## 二、『御免用普請軸帳』を通じて 旧尾仲村の水利を考える

戸原村大庄屋長卯平が企画推進し、博多の豪商立石久明が資産を提供した若杉川から乙犬の井山隧道を経て新大間池に至る五・七<sup>キ</sup>畝の農業用水路は文化十二年(一八一五)から文政四年(一八二二)に完成しました。粕屋町を中心に、この二人の偉業は今日も語られています。この水を供給した若杉村、尾仲村、乙犬村の事情については殆ど不明です。幸い、『御免用普請軸帳 尾仲村、文化十四年』(以下『軸帳』と略します)があり、この古文書を眺めているうちに、なんとなく近世における尾仲村の水事情がわかってきました。そのあらましを紹介してみようと思います。

『軸帳』には、八つの灌漑池があつて、水掛り面積の大きい順にあげますと、西浦池(一六六四年築)二一町五反、切通池(一七七一年)八町八反二畝、田子田池(現在の浦田池、一七七九年)四町七反六畝、枯木谷池四畝余の水田が潰れましたが、百姓達からすれば、新池の灌漑による米の増収のメリツトの方がはるかに大きかったに違いありません。

このようにして江戸時代の日本における米生産量の急増と人口の増加の謎が解けると思われます。

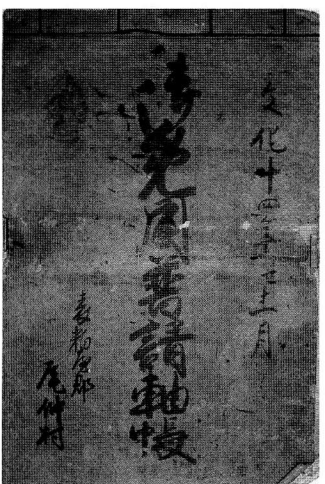
慢性的水不足に悩んでいた新大間池掛り水田の仲原村、戸原村、江辻村、大隈村、須恵村等の農民の米作り、増産への意欲は強く、そのため灌漑水確保に懸命だったと想像されます。その願いを一身に集めた長卯平は連日各地を歩き、遂に若杉川の水に目をつけ、余剰水を新大間池に導く計画を立てました。そのため若杉井堰、龍頭井堰を作り、延々五<sup>キ</sup>畝余の水路を作り、井山の下に百数十<sup>キ</sup>畝の隧道を大困難の末に掘り、新大間池につなげました。

その当時、余剰水を正確に推定し、百八十八町余の水田に水を供給した長卯平の手腕に、私は只々感服するのみです。

なお古文書『尾仲村記録』(享保く文政)によりますと、尾仲村の水田面積は七八町九反とあります。先に

(一八〇九年)二町二反、げし尾池(不明)二町二反、浦野池(不明)一町二反、枯木池(不明)一町三畝、ひきまが谷池(不明)五畝で、合計四一町六畝となっていました。

この『軸帳』から、水掛り面積が大きい四つの池は江戸時代に築造され、全水掛り面積の八五・七<sup>キ</sup>畝を占めています。築造年代が不明の四つの池はいずれも一町五反以下と小規模のもので、中世に築造されたものと考えられます。しかし西浦池は寛文四年(一六六四)と江戸時代の初期に、かなり大規模な水利工事が行われたものとして注目されます。すなわち中世段階における尾仲村の水田の水利は、きわめて小規模な池によつて支えられていて、早魃<sup>はやび</sup>の度に大変な水不足に見舞われたと考えられます。江戸時代になりますと、世の中が平和になり、百姓は農地を安堵され、米作りに精を出し、農書も多く出版され、ある程度社会資本も蓄積されたのでしょうか。その結果、西浦池、切通池、田子田池などが次々と築造されました。これら四つの池を築造するために一町九反掛りです。



篠栗町文化財専門委員  
篠栗古文書会